
戦時体制の「メタファー」としての『時計』言説

読者への情報伝達の回路を中心に

SHIN Seo-Yeong

辛 西永

1. はじめに

『時計』は1934年1月から12月までの1年間、『婦人之友』に連載された横光利一の長篇小説である。横光は同誌上で『花花』（1931年4月-12月）をすでに発表していた。『花花』では「家と家との結合としての結婚」を崩壊させる農村出身の八重子を仲立ちにして、中上流階級の女性の現状を戯画化していった。

中上流階級の『婦人之友』の読者に挑発になるような『花花』の連載から『時計』に至る時期は、1931年9月18日の柳条湖事件に始まり、1932年3月1日の満州国建国と、満州での軍事行動の拡大に反対する犬養毅が暗殺された5・15事件、そして1933年3月に満州国を不承認とする決議に反発して国際連盟から脱退する時期に該当する。つまり、軍部が大日本帝国への支配権を拡大していく過程に重なる。

横光は『婦人之友』1933年12月号に掲載された『時計』の予告としての「作者の言葉」の中で、「幸福というものは、何人の幸福といへどもかつて続いたためしはない。この悲しみから小説というものは生まれてきた。それは私が語ったことではなく、歴史が語ってきたことなのである。つまり私はこれからその歴史（時計）を書くこととするのである」⁽¹⁾と述べた。『時計』という長篇小説を通して、横光は『婦人之友』の読者に「歴史」を書くことを宣言していたのである。

柚谷英紀は、『時計』〈誘惑〉する「純粹小説」⁽²⁾において、立川健二の「誘惑論」⁽³⁾における「メタファー・ゲーム」という概念を理論的な前提として、この長篇小説をとらえ直そうとした。「メタファー・ゲーム」について立川は、「求愛のメッセージをこめたメタファーの意味」、すなわちその言葉を発している者の意図によって「相手をひきつけておきながら」、相手が「動かされているという兆候を見てとったならば、とたんに自分はそしらぬ顔をして字義的な意味」にしておいたまま、話を進行していくと位置づけた。さらに、柚谷は『時計』の主人公かつ視点人物である宇津ではなく、明子という女性の役割に注目した。

柚谷は、「〈誘惑〉はたして宇津からのみ仕掛けられたもの」だけでなく、「明子は、立川健二が言うところの〈誘惑〉の戦略としての「メタファー・ゲーム」を仕掛けているのである」と、『時計』における明子の役割に特別な意味を見い出している。明子の言葉は小説の中の登場人物の関係が、比喩的な連鎖の中に布置されるような媒介的役割をするというのである。

また中川智寛は河上徹太郎の『時計』評を取り上げて、視点人物である宇津の機能に注目した。中川は読者を「幻惑し続ける」宇津の描かれ方を分析して、「主人公宇津は特徴的な描

(1) 「新年号文芸欄予告」『婦人之友』、1933年12月号。

(2) 柚谷英紀『『時計』〈誘惑〉する「純粹小説」』『国文学 解釈と鑑賞』、2000年6月号。

(3) 立川健二『誘惑論——言語と（しての）主体』、新曜社、1991年。

写が多い割にはどこか無顔貌的な面も否め」ない⁽⁴⁾としている。中川の議論を引き継ぐために『時計』における横光の創作態度に対する河上の批評に注目してみよう。

すなわちインテリ対彼自身を書くのだ。[中略]氏はインテリの生活を外から描写しようとしなくて、彼の生活感情に沿って之と共に流れ乍ら移動撮影していった。[中略]読者は、主人公の宇津がどんな人物であるかとか、どの女をものにするかなど考える暇もなく、只この文学独自の持続に自分の歩調を合わせる。かかる時、作品の持つ現実性とは一体何ものであろうか？⁽⁵⁾

河上は「インテリ対彼自身」という言い方で作中の視点人物宇津の認識レベルと、横光自身と見なされている地の文の書き手の役割を重視している。河上はあえて「主人公の宇津がどんな人物であるかとか、どの女をものにするかなど考える暇もなく」と述べている。中川が注目したこの指摘は、先の柚谷が明子という作中人物を重視する立場と重なる。

こうした柚谷と中川の論点を結びつけながら、柚谷と中川が論じていない、河上の言う「作品の持つ現実性」という指摘を生かすのであれば、『時計』の中に表れる言説は小説の内部だけでなく、その外側としての満州事変後の戦時的状況へと結びついていくのだと想定できる。

宇津は視点人物であるが、登場人物の関係性についてすべてのことを認識しているわけではない。読者だけに伝達している書き手の言葉、宇津と明子の会話の場面、明子の言葉に解答する形式の青木の言葉、青木からの明子への手紙を通して、読者は小説内の人間関係が何を比喩するかを読み取りながら、その比喩を「作品の持つ現実性」とのかかわりでとらえ、さらに小説内の現実性を小説外の現実と関連づけて想起する。すなわち読者は日本が国際連盟の脱退後、対外貿易において難航を重ねている中、1934年『時計』の言説を、戦時体制の隠喩的なものとして読者は認識するようになることをめぐる論じてみよう。

2. 地の文の書き手と明子の言葉

『時計』の視点人物である宇津は、大学で音響学を講義する傍ら、友人の青木から習ったピアノの調律によって生計を立てている。『時計』の主な舞台は、宇津がピアノの調律のために訪問する家々と音楽会である。小説全体を通して、宇津が接していく登場人物の恋愛と結婚

(4) 中川智寛「横光利一時計論」『名古屋大学 国語国文学』第98号、国語国文学会、2006年。

(5) 河上徹太郎「横光氏の「時計」」『横光利一全集』第6巻月報、河出書房版、1956年3月。

の問題が、家同士のしがらみの問題であることが、次の地の文から明らかになる。

青木家と千早家とは、旧藩主が同じで家柄も等しかったところから、代々と親しい交渉を持って連つて来ているうえに、父達の関係会社もまた同じ系統のもとにあった。二家の盛衰はいつも一致して進んで来ている。しかし、二家の関係しているある護謨会社が、他会社との合同のため、株主が二派に分裂してしまい、株主争奪の渦巻に巻き込まれて久しい間の交宜は幾分悪化して来つつあるのは事実だった。だが、そんなことは、雪枝と青木義夫との間の決裂にまで影響を及ぼしていようとは想像されることではなかった。⁽⁶⁾

上の引用部では、青木家と千早家の関係についてこれまでに宇津が知りえた情報が明らかにされる。江戸の頃「同じ」藩と家柄だった青木家と千早家の「父達」は、共に「同じ」「護謨会社」に「関係して」おり、現在は「他会社との合同」をめぐって「株主が二派に分裂」した結果、両家の間が「悪化」しているところまでは、視点人物である宇津も認識していることとして示されている。

しかし、最後の一文は、「雪枝と青木」の関係が「決裂」状態になっていることについて宇津が認識していないことを小説の読者だけに地の文の書き手が伝えるものになっている。ここに河上の言う「インテリ対彼自身」、すなわち作中の視点人物の認識を相対化する地の文によって読者に提示される作者の位置が刻まれているのである。読者は雪枝と青木、瀧子と三笠の恋愛と結婚の背後には何が潜在しているかということに疑問を抱きながら、小説を読み進めていく。

雪枝の妹である瀧子にからまれ、その夫であった三笠にもつきまとわれ、混迷を深めている宇津に即した小説の進行は一旦中断され、「ある日曜の朝、明子は明かりとりの窓から朝日のさし込んで来ている階段を登っていた」と、明子に焦点化した場面に転換する。明子は音楽学校のピアノ科を卒業する予定である瀧子の妹である雪枝の友人である。明子は宇津と青木、峰の愛の相手でありながら、雪枝と持続的な友人関係を維持してきたためだか、「護謨会社」とかかわる千早家と青木家と峰家と三笠家のあり方と成り行きについて宇津より詳細に知っている人物だ。明子は宇津のように「護謨会社」と絡んでいる家の子女ではないが、小説の展開を挑発する軸となる存在として、冒頭から最後まで宇津と共に登場している。

(6)『時計』の引用は『定本横光利一全集第六巻』（河出書房新社、1981年、9-10頁）に拠る。以下、『全集第六巻』に略称する。旧字体とかな遣いは新字体に改めている。

明子の家に「ピアノを直し」に来る宇津からの電話が入り、つづけて「青木義夫の怒ったような激しい手紙」を明子が読むという設定で、その文面が直接読者に提示されることになる。『時計』という小説における読者への情報の伝達回路において明子が特別な位置、すなわち小説の読者である方向に「誘惑」する役割を与えられていることがここで明確になる。「私はまたお手紙をさし上げます」という出だしから、青木が何度も明子に手紙を書くことを繰り返して来たことを読者は理解する。この時読者は、青木から明子への私信を“盗み読み”する特別な位置におかれることになり、明子の「誘惑者」としての役割が強化されていく。

さらに「あなたは私が雪枝を愛していると思っていられます。しかし、それは間違いだということとはもう幾度申し上げたことか御存知の筈ではありませんか」という青木の手紙の文面から、読者は先の引用において地の文の書き手から提示された「雪枝と青木義夫との間の決裂」が決定的なものであったことをやはり宇津の認識を超えて把握することになる。

この明子宛の青木の手紙が読者に示された直後、明子の眼の前に「数疋の栗毛の馬が騎兵をのせて駆けてきた」のであり、やがて明子は外に出て、「騎兵の馬」の「傍を通りぬけ」歩いていくときに、どこからか「朝の練習」の「ノクターンが聞こえて来る」のである。

このとき明子が「今や誘惑に落ちかかろうとしている甘美な気持ちに抵抗しながら雪枝や青木の顔を思い浮かべているのだった」と、ここで音楽に「誘惑」されている明子の姿に表現されるが、音楽に「誘惑」されるように他の登場人物を「誘惑」していく存在として、地の文の書き手は読者に文字どおりに「誘惑」と隣接する明子の小説内的役割を示しているのである。そして、ここで宇津がやってくる。

宇津は調律をしながら、自分に付いてくる瀧子を念頭においたまま、瀧子が三笠のところには帰らないかと明子に訊くことから、明子の言葉は宇津を「誘惑」する戦略としての役割を果たしはじめる。宇津が「誘惑」される形態で三笠と瀧子の関係が、明子の言葉によって明らかになる。

「もとから三笠さんをお嫌いだったんじゃないですか。何かお父さん同志の株の関係とかでお行きになったとかいうお話ききましたが、それじゃあんなにおなりになるの、ご無理はないとあたしたち思いますわ。」⁽⁷⁾

(7)『全集第六巻』(前掲)、44頁。

「もとから三笠さんをお嫌いだった」という明子の言葉は、瀧子が自分の意志で三笠と結婚したことではないと宇津に考えさせるようにほめかしている。瀧子と三笠の結婚は、父同志の「株の関係」と絡んでいるという明子の言葉は、宇津の意識を二人の結婚と離婚の騒動と「護謨会社」の合同を関連づけるように導いている。

読者にとっては「もとから三笠さんをお嫌いだった」という明子の言葉は、瀧子と三笠の宇津の知ることの出来ていた同世代の男女の結婚の真相が、家と家の利害関係はもとより、「護謨会社」の経営にかかわる「お父さん同志の株の関係」で成されたことを明らかにする。『婦人之友』誌上で連載小説として読む読者には、宇津が知っていた「他会社」が、実は三笠の父の経営する会社の小説内での比喩的なものだとなされるのだ。

宇津は、明子の言葉から、かつて三笠と話をした際に、「父の名が出ると」「ひどく周章てた」ことは「思い出」すが、視点人物であるにもかかわらずそれ以上は考えることはない。さらに宇津はその後青木と話をし、三笠と結婚する前に瀧子が峰美津子の兄と「恋人」関係にあったことを知らされるが、「ああ、もう自分にはわからない」と思考停止してしまうのである。

それに対して、地の文の書き手は「宇津に新しく襲って来た心の問題も」「最後は、必ずいつも明子の顔に支えられて彼は漸く立ち上がることが出来るのであった」と、明子が認識の導き手であることを強調する。

宇津の認識と地の文の書き手の読者への指摘をめぐるとこの対比を、『婦人之友』の読者は『時計』という長篇小説を読み進めていくと、その基本的な枠組とさせられていくのである。

すなわち、明子が宇津にしかけている、柚谷の言うところの「〈誘惑〉の戦略としての「メタファー・ゲーム」を、小説世界の外側の雑誌読者が受けとめていく関係がここまでのところで構築されているのである。

小説内部の世界においては、宇津が巻き込まれている瀧子と三笠の離婚騒動は、実は千早家と青木家がかかわっている「護謨会社」の利益のため起こったことが分かる。千早家の父が娘瀧子を政略結婚の道具に使い、三笠幹高と結婚させ、その父の経営する会社の株式を買い取ったのだ。三笠の父の「護謨会社」は、先の引用部の「他会社」であることが明確になる。息子と娘の世代の恋愛と結婚をめぐる関係性は、父の世代による株の買いしめと会社乗っ取りの隠喩的機能になっていることを明子の言葉は読者に喚起させたのである。

『婦人之友』の読者は小説の外部の世界とも接している。それは同じ雑誌に掲載されている

同時代の状況をめぐる記事の中身である。明子の存在は、最初から「騎兵」と共に位置づけられている。しかし小説内部の世界において、その設定は特別な機能を担わされていない。「騎兵」の機能は小説の外部と『婦人之友』の読者をつなぐために設定されている。

たとえば、横光の「作者の言葉」と同じ号に掲載された『婦人之友』1933年12月号の西野喜與作「日本商品の世界的進出」の役割について考察してみよう。西野は「日本兵と時計の針はカッタカッタと進み行く」という「日本軍の進軍」という比喻によって「日本商品の世界的進出」を表現している。西野は、「列強貿易の後退」という言い方で、第1次世界大戦後の「米国、仏国、独逸、伊太利の諸国は、輸出入共1931年と1932年と比較して、激減して」いる状況を説明し、1933年にも「著しい改善の跡を示していない」「かかる国際情勢の下に、我が国の貿易のみが独り躍進している」と述べている。日本の経済的発展が「日本軍の進軍」という比喻で語られている。

西野の論は国際連盟の脱退の前の段階では、世界恐慌の中で欧米の製品の価値が下がる中、日本の製品が逆に需要を伸ばしていったことを明らかにしている。このように、日本製品の輸出が急増した背景には、1931年の満州事変の後の状況が深くかかわっている四宮正親氏の研究をふまえれば、「満州事変を境に、軍部は発言権を強めて、自動車国産化行政の主導権を握って」⁽⁸⁾ったことが分かる。「自動車産業」が「外資系企業の支配下におかれていた」⁽⁹⁾ため、その「国産化」は軍事目的に「国防の観点から重視されている」⁽¹⁰⁾たのだ。

小説全体を通してそれぞれの作中人物の家と家との間を宇津が移動していく時、「自動車」を交通手段として使っている。視点人物宇津にとって、登場人物の関係性が明確になっていく媒介が、「自動車」なのであるこの設定は『時計』の父親たちの会社が、なぜ「護謨会社」なのであるかを論じることの前提となる。

このような西野の論を基にして『婦人之友』の誌上で『時計』を読む読者は、「護謨会社」が国産化されていく自動車産業とのかかわりで考えることになるのである。『時計』という小説の中では父たちの会社は「護謨会社」とだけ示されている。このことから、タイヤをはじめとするゴム製品を想起する企業と南洋における原材料としてのゴムを栽培する会社の両方を読者は想起したはずである。

西野の論を媒介に『時計』の読者は、『時計』の「騎兵」が、軍部の方針において「騎兵」がなくなって「自動車」に転換することを象徴すると読み取れる。「騎兵」が大日本帝国陸軍

(8)四宮正親『国産自立の自動車産業』芙蓉書房出版、2010年、78頁。

(9)四宮正親(前掲)、173頁。

(10)四宮正親(前掲)、81頁。

の主力であったのは第1次世界大戦までであった。重火器や機関銃が発達することによって「騎兵」の能力は大きく制約されることになり、戦闘集団としての最後の活躍の舞台が第1次世界大戦であり、その後「騎兵」の役割は自動車、戦車、飛行機といった、第1次世界大戦で導入された装甲機械兵器にとって変わられていく。「騎兵」から自動車への転換は、戦争の方法の転換であった。

1932年度より「戦車隊、装甲自動車隊の増加」⁽¹¹⁾を実施し、1932年上海事変で陸軍はイギリスの装甲車を戦場に出しているが、1933年3月国際連盟の脱退の後には、装甲車の国産化へ転換する。小説内の「騎兵」という設定は、小説外において「騎兵」から第1次大戦後に戦争の技術が陸軍によって自動車の国産化へ転換する「軍の機械化」を読者に想起させられる機能をする。

ここから、予告文である「作者の言葉」の中で横光が『時計』の創作意図は「歴史を書く」ことにあるとしたことを想定すれば、「合理と不合理の間に絶えず立ち現われ」てくる「暗面」には「何ものがある」ということは、『時計』の「騎兵」が小説の外の「軍の機械化」という「歴史」の状況とかかわるということを読者は喚起できるというのだ。

つまり、『時計』で横光の書こうとする「歴史」は、予告文での「暗面」とのかかわりで、同時代の「護謨会社」をめぐる情報に注意を注いでいる読者において小説の設定としての「騎兵」を、小説外の現実世界である軍部による自動車産業の国産化と結びついて読んでいくのである。

『時計』の作中人物の父たちの経営する「護謨会社」は、『婦人之友』の読者にとって同時代状況への強い喚起力、すなわち「メタファー」の役割を担うのである。外資系であるダンロップ護謨（英）と横浜護謨のグットリッチタイヤ（米）が日本では市場を支配していたが、1931年ブリヂストンタイヤが自動車の「国産タイヤ」を旗印として市場に供給されると、3社との間で「三ツ巴の市場争奪戦がはじまった」⁽¹²⁾。当時「新聞紙上には「タイヤ騒動史」が掲載される有様であった」⁽¹³⁾。読者意識は『時計』の三笠家の「護謨会社」を合同するために千早家と青木家と峰家が争うことと同時代の3社の「乱売戦」を結び付けられる。

1933年3月国際連盟の脱退で海外輸出の戦略が不可能になったため、1933年10月24日の会議で、ブリヂストンタイヤの石橋社長と中道達治商務部副部長は、「当社は海外輸出に努力しているが」、「英、米ブロックの対日輸入制限政策によって苦しんでいる」と述べている。こ

(11) 桑木崇明『陸軍五十年史』鱗書房、1943年、382頁。

(12) 『ブリヂストンタイヤ五十年史』ブリヂストンタイヤ株式会社、1982年、61頁。

(13) 日本ゴム工業史編纂委員会『日本ゴム工業史』日本ゴム工業会、1950年、555頁。

の時期3社の対立において最も重要なことは、イギリスとアメリカが日本に対して輸入制限を展開したためである。これに対し、ブリヂストンタイヤはダンロップ、横浜護謨両社と「乱売戦」を避けるとともに、「共同戦線を張って日本タイヤの海外輸出に努力したい」⁽¹⁴⁾と力説する。ブリヂストンタイヤの位置は、孤立されていく日本のゴム産業を国家独占体制下で更生させようとする軍部の方針と結びついている。

3社の「乱売戦」と「共同戦線」という同時代の現状を、読者は『時計』における「護謨会社」同志の株と合同のことで重ねて読み取れる。つまり、読者は明子の言葉を媒介にして明らかになった家と家による「護謨会社」の合併の問題は、日本が国際連盟を脱退した後、対外貿易において圧迫されていた同時代のゴム産業の問題と関連付けて想起する。

日本企業の南方におけるゴム栽培は、『時計』が連載される4ヶ月前、すでに東京毎日新聞の1933年9月14日付の記事では、日本の「海外企業として重視されている南洋のゴム栽培事業は世界的不況を受けて」「ゴム園」が「漸次売り払わざるを得ない状態に陥」っていたという。南洋護謨園の難しい局面を打開するために「拓務省」が「大合同案を支持しているので」「部分的合同をすることも多少の可能性あるものとされている」としている。

以上の状況により、ゴムの原材料生産において「護謨会社」間の合同が大きな問題となっていた。このために、読者は『時計』の「護謨会社」の合同の問題を、新聞で報道されるゴム産業の合同の問題と直結させて考えるのである。

小説内の「護謨会社」の合併は、タイヤ生産において3社の「乱売戦」とゴムの原材料の会社の合同という小説外の比喩となるのである。また、逆に小説外は小説内の「護謨会社」間の対立の深刻性をうながすということである。つまり、明子の言葉は、小説内部における比喩としてだけでなく、横光自身の言う「歴史」、すなわち小説の外にある同時代的な状況の比喩となる。

『時計』において「護謨会社」の利害関係をめぐる千早家と青木家の父たちが、子女たちを結びつけて「護謨会社」の合併のために働きかける。これに対して明子の言葉から出てきた瀧子と三笠のことから言えば、子女たちが反発して父たちの計画を崩壊させるのである。

3. 明子の言葉に応答する青木

明子の宇津への言葉は、小説の内部での作中人物の恋愛と結婚の問題が実は「護謨会社」

(14)『ブリヂストンタイヤ五十年史』（前掲）、62頁。

の合併と株の取引とかかわっていることを読者に明確にする役割を果たしている。「騎兵」の団に、いつも「あたしん所の井戸」で「水を飲ませてあげる」という明子と共に宇津は「自動車」で、彼女の友人の峰美津子の青山の家へと向かう。調律を始めた宇津は背後に人の気配を感じると、そこには「あの演奏会で出会った典雅な例の青年」が立っていたのである。

この青年の中に宇津は「女性の心」はもとより、「男性の心も奪ってしまう奇怪な物凄さ」を感じるのである。そして視点人物としての宇津は、この青年、すなわち峰のことが、「明子や瀧子よりもっと美しい女性達」を自らのとりこにするばかりでなく、「峰のために明らかに苦しめられている三笠や青木の苦痛」の理由を明確に認識し強い敗北感を抱く。

峰によって与えられたこの衝撃のため、宇津は「一直線に自動車を家まで走らせ」、さらに「真っすぐに走らせ」、さらに「途中で」思い直して「くるりと車を向け返ささせて」「青木の家」に「疾走」させたのである。

小説の内部においては、明子から紹介された峰に対する過剰な反応から、視点人物である宇津が、「自動車」を「疾走」させつづけることになるのである。

これまで宇津がピアノの調律でかかわってまた家と家の関係を、その家の娘たちと息子たちとの関係を、宇津の意識の中で、峰に対するきわめて強い嫉妬と敗北感でつなぐことであったことが、峰との対面の後、宇津が反発的に「自動車」を「疾走」させることから表明されている。明子の小説内部における役割は、「騎兵」を仲立ちとしながら、宇津をして峰に対する敵対感を抱くようにする機能を果たしているのである。

しかし、『時計』という長篇小説の外側で物語を読み進めている読者に対しては、小説内部に登場する男女ではなく、彼や彼女らの父親たちが、彼や彼女らを政略結婚の道具に使いながら、「護謄会社」をめぐる合併と株の取り引きをめぐる利害関係で策動していることが強く喚起させる役割を担っているのである。明子に手紙を出し続けていた青木の言葉が、そのことを読者に確信させる。

「僕は雪枝が峰と結婚するんじゃないかと思ってるんだが、[中略] 雪枝のファーザーと峰のファーザーとは、護謄会社をやったんだ。僕の親父も混っているにはいるんだが、ところがこの重役連が分裂しちゃって、他の三笠の親父のやっている護謄会社と合併しようという一派と、独立でいこうという二派の重役たちの、株主争奪戦が始まったの

でね、峰のファーザーと雪枝とこのファーザーとが共同で、僕の親父に当たり出して、ぐるぐるやってる最中なんだ。つまり、三笠の親父の会社を乗り取ろうという肚さ。」⁽¹⁵⁾

青木の言葉では、千早家と青木家のかかわっている「護謄会社」に実際は峰家が重要な役割を果たして三笠家の経営する会社との合併を主導しているという新たな情報を読者は宇津と共に知らされることになる。

ここまで小説を読み進めて来た読者としては「護謄会社」の合併を推進するため千早家と峰家が協力する中、青木家と千早家に対立したことによって青木義夫と雪枝とが「決裂」に至ったのであり、千早家と峰家が結んで三笠の「護謄会社を合併」した事情が明確になる。

宇津に向けられた明子の言葉が恋愛と結婚の問題は実はその父たちの経営する「護謄会社」の株の問題だと露呈され、青木の言葉を通して家のそれぞれの子女の結婚は「護謄会社の合併」の手段となることがとらえられ、読者を刺激する明子の役割が発揮されているのだ。

怒りをこめて峰のことを批判する青木は、峰が父親の会社の利益のために、他家の女性を誘惑しては裏切る存在であると言い、「恐らく峰を見破っているのは、僕だけ」だとも言う。青木は明子が「峰の毒爪」にかからないために「非常手段にうったえ」ることも考えているという。

立川の「誘惑論」での「メタファー」とは、「字義どおりの言葉の背後に幅のひろい、あつみをもった連想の帯が潜在している言語過程のことである」⁽¹⁶⁾、という論を展開している。「言語の背後」には「連想の帯」があるとは、青木の説明によって、明子の言葉である登場人物の恋愛と結婚の問題が、宇津に「護謄会社」の利権をめぐる争いとして認識され、さらに読者は小説外の状況とつなげることに適用させられる。青木家の父と青木が合併に反対するため、青木家と千早家に対立することになるのである。さらに、読者は三笠家の会社の真意とは関係なく、峰家と千早家が協力して峰が三笠の会社を「乗り取」る問題に直面する。この合同は峰家が主導しており、いわば千早家と峰家と三笠家の三家の「護謄会社」の合併をめぐる争いだと言える。

明子の言葉が果たす役割は、視点人物宇津を媒介にして読者を「誘惑」することにある。明子の言葉が恋愛と結婚の問題は千早家と青木家とが三笠家の合同をめぐることを連想させることを媒介にして、青木の言葉によって峰家がかかわって、3家がかかわっている1つの「護

(15)『全集第六巻』(前掲)、63頁。

(16)立川健二(前掲)、146頁。

護会社」が三笠家の「護謨会社」を合併させると、宇津にも読者にも確信されたのだ。

宇津に先行して読者が明子の言葉に導かれながら類推したすべては「護謨会社の合併」をめぐる株の利権争いであるという事実が、宇津に向かっても突きつけられているのであり、読者としてはこれまで書き手の言葉に導かれながら考えてきたことが小説内の事実なのだと完全に確信するのだ。

宇津は瀧子が自分の家でとまっている中、明子の家へ来て「騎兵」の出没に対してふれてから、明子との結婚を「希望」している青木の立場を明子に伝える。宇津は、青木が「峰を嫌っている」とことと、明子に手紙を送っても返信がないため、「青木は明子さんが峰さんの兄さんを愛してらっしゃる」と言ったことを明子に口にする。宇津は青木と明子の間を仲介する役割を果たす。

青木の言葉で「護謨会社」の合同の問題が出て、宇津は明子の家で峰が導く合同から離脱するために青木が明子との結婚の意思を明かしたことを明子に伝えた後、明子と共に2番目の「騎兵」と遭遇する。峰を牽制するために青木が近づく明子との関係に「騎兵」のことと共に宇津が介入される。明子の言葉の小説内の隠喩的機能は、宇津が明子に「誘惑」されて「護謨会社」の合同の問題をめぐる登場人物の関係性を表面化する時、「騎兵」が象徴的に出てくる設定である。

読者からみれば、前述の通りに明らかに明子のところで宇津が明子の言葉を通して「護謨会社」の合同の問題による政略結婚を自覚する部分と、「護謨会社」の合同を主導する峰を牽制するために明子との結婚を宇津を通して明子にあかす状況に即して「騎兵」は、時代性を表している「護謨会社」の合同を批判している。明子の言葉を隠喩的なものとして扱う立場から「騎兵」を指摘できる。読者にとっては子女たちの恋愛と結婚の語りではないということを知るため、明子をめぐる「騎兵」は、なくなった戦争手段で、あえて小説に出てくることから、小説外での戦時体制のための自動車の国産化を想起させることで、これは迫ってくる戦争の隠喩的なものとなっている。

つまり、『時計』は家と家との利害関係と政略結婚の問題を描写しているように見えるが、同時代的状況下では、読者の意識はおのずと「護謨会社」の問題に向かっていくのである。満州事変の以降、国策としてのブリヂストンタイヤは軍部によって養成された。ゴム製品の製造業においては、ブリヂストンタイヤの石橋正二郎が「一九三四年からソリッドタイヤ、ゴ

ルフボールを生産開始し、次いで航空機タイヤ、防振ゴム、自動車タイヤなどを生産するにいたった⁽¹⁷⁾ことである。

第1次世界大戦後の列強の軍需の在り方は決定的に変わっていった。その中で軍勢力の中心は装甲車輪になり、その重い本体を支えるためにもより強い自動車タイヤの開発が不可欠となり、この技術と連動しているのが航空機タイヤの技術である。航空機にとって決定的なのは離着陸の技術であり、その要となるのが、機体の重さを支えうるだけの航空機タイヤの開発である。

自動車のエンジンにとってはもとより、とりわけ航空機においては、エンジンの振動を吸収して安定した運行に不可欠なのが、「防振ゴム」である。ブリヂストンの技術開発はすべて、軍事的な用途と結びついていたことは明らかであり、そのことが、1934年の段階において、新聞等の報道で大きな話題になっていたのである。したがって『婦人之友』における『時計』の読者は、小説内部の設定を、小説の外の現実の「歴史」過程と結びつけながら読み進めることが可能であったのだ。

「乱売戦は激化の一途をたどり、一九三四年三月一六日、タイヤ製造販売業者が協議会を開催して自主規制を申し合わせたこともあったが、効果はなかった」⁽¹⁸⁾。「三ツ巴の市場争奪戦」は、国際連盟の承認国であったアメリカとイギリスの会社と、ブリヂストンタイヤが対立することで、これは日本の国際連盟の脱退の後の象徴的な事件となった。日本で売っていた欧米の製品と、ブリヂストンタイヤのような純国産の護謄製品は日本国内で競争を繰り広げた、これは海外で造られた製品との争いになった。

『時計』において『婦人之友』1934年4月号に掲載された青木の言う千早家と青木家と峰家がかかわる1つの「護謄会社」が、三笠家の「護謄会社」を合併させるための争いは、予告文で横光が述べた「歴史」と結びついて、同時代ゴム産業を国家独占下で推進していたブリヂストンタイヤを中心とした1934年絶頂に至った「乱売戦」と関連づけて読者においては連想されるのである。

ゴム産業の原材料においても、欧州と競争する日本は国際連盟を脱退した後から不況を味わう。日本は南洋からゴムの原料を持ってくるため、南洋の原材料を生産する現場も含めて、生産調整が問題となる。原材料の生産について、柴田善雅によれば、「一九三四年二月二七日南洋栽培協会の「南洋栽培事業振興ニ関スル請願書」」には、「ゴム価格が低迷を続けているが、

(17) 高橋武雄『化学工業史』産業図書、1973年、383頁。

(18) 『ブリヂストンタイヤ五十年史』（前掲）、1982年、63頁。

その救済策として長期低利の政府系金融機関設置のみならず、二重課税回避、「ゴム清算取引設置まで幅広い論点」⁽¹⁹⁾があった。これは、国際連盟を脱退してから外国企業との貿易が中断され国際的に孤立していく日本の危機感の中で、軍部による自動車産業の国産化と連動したタイヤの国内の過剰生産と結びついたことを指している。

『時計』の作中人物の恋愛と結婚関係をめぐる話として読まれる「言葉の背後」を分析した結果、家・株・合同などの「連想の帯」があることに焦点を絞ることができる。これは、「平和というものは戦争が存在しないということではない」というスピノザの戦争論を横光が予告文で引用していることから、読者においては、同時代の設定をテキストの背後に読みこむことで、ゴム産業と軍部との結託を類推できて日本の戦時体制の「メタファー」として機能している。ゴム産業と自動車産業という小説外部の事情を小説の解釈に読みこむことで、逆に小説内部の設定を戦争の「メタファー」として読者は解釈できる。

4. 回された手紙の機能

長篇小説『時計』の読者は、明子が宇津にほのめかす「お父さん同志の株の関係」によって、三笠と瀧子との結婚が行われたことを認識していく。恋愛と結婚の背後には、その父親たちの「護謨会社」の「合併」をめぐる「株主争奪戦」があったことを、青木の宇津への告白から、読者は明確に意識するようになる。

それまで明らかにして来たように、『時計』が『婦人之友』に連載されていた時期、南方における植民地プランテーション型「護謨」栽培の会社間においても、また自動車の国産化を急速に進めようとする陸軍の方針とのかかわりにおけるタイヤや防振装置を中心として「護謨」製品を製造する会社間においても、「合併」と「株主争奪戦」は日々新聞記事で報道される記事の内容と通低していた。

『婦人之友』では、国際連盟を脱退した後の大日本帝国の進路に不安を抱く読者を対象にいくつもの国際経済の現状についての特集記事⁽²⁰⁾を掲載していた。『時計』の「護謨会社」をめぐる設定は、虚構の世界である小説世界に、同時代の大日本帝国の軍部の方針と結びついた産業構造の統制の在り方について、雑誌の読者の関心を、その雑誌の中の現実の歴史過程をめぐる記事と、小説の展開とを結びつける機能を果たしていることを本稿では明らかにして来た。

(19) 柴田善雅『南洋日系栽培会社の時代』日本経済評論社、2005年、228頁。

(20) 羽仁もと子「平和の問題をめぐる」、横田喜三郎「今月の問題、連盟脱退の後に来るもの」『婦人之友』1933年4月号。

明子の果たす読者への役割は、恋愛と結婚をめぐる男女関係の背後に、小説内部の物語の進み方とのかかわりにおいては、その父たちの「株」をめぐる利害関係の対立を喚起する隠喩的機能を担うものである。小説内部における父親世代の「株」の利害関係を全体として差配していたのが、謎めいた設定をされていた峰である、という青木の宇津への真相暴露は、読者の意識を、小説の外部へと引き出す機能を担っている。それは青木の明子への思いを綴った手紙が、地の文の書き手から、読者にだけ、視点人物の宇津を超えて提示されるという小説の内と外の構造と結びついているからである。

峰と明子が共にポートに乗っていることを宇津が信州の野尻で目撃する。これは『時計』が明子への最後の青木の手紙が宇津に回されて読者に明示されて終わることとかがわる。ここで最後の青木の手紙をどのように位置づけるかが最も重要となる。

明子は峰とすでに結婚が決定されたにもかかわらず、明子と結婚しようとした青木は手紙で宇津と結婚することが明子に「与えられた唯一の義務であ」という。だが、地の文の書き手は宇津の意識に即して宇津への明子の手紙には前述の「青木の希望とは反対の意味が表れている」ため、「突然、峰の秀麗な顔が浮き上がってくると、万事はそれで解決されたように思われてくるのであった」という。書き手は明子の手紙を媒介にして登場人物の関係が恋愛と結婚の問題ではなく、「護謨会社」の利害関係だったことで、回された青木の手紙で明子と峰の関係が不可分に進行していたことを自覚できるよう読者を導いている。

青木の手紙を通して明子と峰の「結婚」が確実になって明子が「護謨会社」の合併を破れる存在であることが明かされる。『婦人之友』の読者は、手紙の役割を通して『時計』を、同時代の国際連盟を脱退した後、日本の国際関係が孤立されていく中、日本の軍部の方針によってゴム産業が国家独占資本主義に巻き込まれていくことをめぐる「メタファー」として解釈できる。このことを批判するために横光は『時計』を連載したはずである。

